■作品タイトル：
『押せ!!』
■元にした作品：
アンデルセン童話『裸の王様』
■著者名：
岡本　伸吾
■あらすじ：
童話『裸の王様』をモチーフにした人間ドラマ。売上ゼロの新人・藤堂は苦悩する。先輩の山口に背中を押され、藤堂が放ったのは飾りのない願いだった。「本音」の強さを描く。
■想定の尺：
約10～15分
■特記事項：
セールスの物語でありながら「人を動かす言葉とは何か」を描いた短編です。
==========
【ここから本編】

〇百貨店・催事場／朝

慌ただしい搬入。

版画。

油絵。

イーゼル。

社員たちが走り回っている。

輪になる三十人ほどのアドバイザー。

画廊社長
「今日も全員ゼロで帰らないように!!」

全員
「はい！」

男上司
「やるぞ！やるぞ！やるぞー！！」

全員

「やるぞ！やるぞ！やるぞー！！」

藤堂（24）、
拳は猫パンチ。
少し遅れて叫ぶ。

隣の山口（28）、
拳を突き上げ、
デカい声で叫ぶ。

〇催事場／昼

客で賑わう会場。

DCブランドに身を包む客もいる。

色彩の洪水。

香水の匂い。

熱気と欲望。

シャガール。

ビュッフェ。

カシニョール。

藤堂、
中年夫婦を接客している。

藤堂
「こちらの作家は、
戦後フランスで――」

夫婦、
愛想笑い。

少しずつ離れる。

藤堂、
気づかない。

遠くから見ていた山口、
ため息。

〇催事場／同日・午後

山口、
初老の男性客の横に立つ。

絵を見ている男性の隣で、

山口
「こんにちは、いらっしゃいませ。
……お客様、
これくらいの大きさの絵が
飾れる壁、余ってませんか？」

男性、
少し考える。

男性
「……玄関、かな」

山口、
小さく頷く。

遠くで藤堂、
その様子を見ている。

〇バックヤード／夕方

売上表。

契約書。

のど飴。

怒号。

女上司
「オリコの契約書、
誰が切らしたのよ！！」

年配社員
「それだけ売れたって事じゃない。
よかったよかった。(笑)」

笑い。

藤堂だけ売上ゼロ。

男上司
「お前まだか (笑)」

笑い。

年配社員
「新人やしな」

笑い。

藤堂、俯き苦笑い。

間

山口、
缶コーヒーを投げる。

山口
「おい。
お前、また説明してたろ」

藤堂
「え？」

山口
「客は美術館に
来てると思ってる」

藤堂
「……」

山口
「でもな、ここは展示即売会だ。」

○ビジネスホテル／夜

狭いツイン。

コンビニ弁当。

ネクタイを緩める山口。

藤堂、
メモ帳片手。

山口
「よし、ロープレやるぞ」

藤堂
「はい」

藤堂、
立ち上がる。

藤堂
「いらっしゃいませ！」

山口
「ストップ」

藤堂、
即、固まる。

山口
「"いらっしゃいませ"って
言われた瞬間、
客は何考える？」

藤堂
「……え」

山口
「"売り込まれる"だよ。
だから無視される。」

間。

山口
「最初は
"こんにちは"だ」

藤堂
「こんにちは……？」

藤堂、メモ帳に書く。

山口
「知り合いかな？
と思って振り向くんだよ」

藤堂
「えっ？――」

山口
「いいから続けろ」

藤堂、
やり直す。

藤堂
「こんにちは」

山口、
客役になる。

山口、
振り返り藤堂を見る。

藤堂
「いらっしゃいませ。こちら、
人気の作家で――」

山口
「はいストップ」

藤堂
「えっ」

山口
「お前また
絵の説明してる」

藤堂
「でも、
説明しないと――」

山口
「俺達は絵の説明をしに
来てる訳じゃない」

山口、
壁を指差す。

山口
「例えばシャガール。
お前ならどこすすめる？」

藤堂
「リビング……ですかね？」

山口
「普通だなぁ」

藤堂
「え？」

山口
「例えばトイレだよ」

藤堂
「トイレ！？」

山口
「家の中で
一番 壁 見る場所だぞ」

藤堂
「いや、さすがに…
トイレなんかに絵、
飾るんですか？」

山口
「だから
売れねぇんだよ」

藤堂
「いやでも……
シャガールですよ？」

山口
「シャガールだろうが
カシニョールだろうが、
毎日ゆっくり見る場所に
置かなきゃ意味ねぇだろ」

間。

山口
「絵を売るコトって
その人の生活を
変えるってコトだよ」

藤堂、
黙る。

山口
「ほら続けろ」

藤堂、
少し考える。

藤堂
「……トイレに、
シャガール如何でしょうか」

山口、
吹き出す。

藤堂
「えっ？」

〇百貨店・社員食堂／昼

山口、
メニューを見ている。

山口
「おい、
なんか凄いメニューあるぞ」

藤堂
「ストレス解消サラダ
和風ドレッシング添え……
ですか？」

山口
「どんなサラダだと思う？」

藤堂
「噛みごたえによる
ストレス発散と…
ストレスを和らげる栄養素を
両立させたサラダ……
ですかね」

山口
「ん〜でも
ストレス発散の仕方なんて
人それぞれだろ？」

藤堂
「ですよね」

山口、
ふと壁のポスターを見る。

山口
「……ってか、
ストレス社会の世の中で、
こんな作品がリビングにあると
生活変わると思いませんか？
……とか、
使えそうだな」

藤堂
「食事中もセールストーク、
考えてるんですね」

山口
「……当たり前だろ」

間。

藤堂
「ってか凄い作品、
売ってましたね!!」

山口
「コレちょ、だよ」

藤堂
「なんですか？
コレちょって」

山口
「"コレちょーだい"って
言われただけ」

藤堂
「え？」

山口、
少し笑う。

山口
「ただ……客から
"コレ下さい"って
言われる事は まず ないからな」

間。

山口
「だから、最後は
こっちから押せ」

〇催事場／翌日・昼前

混雑。

次々に貼られる
「売約済」の赤札。

外される版画。

運ばれる新しい額。

男上司
「シャガールの
オデッセイシリーズ完売したから
全部 引き上げて！」

社員たち、
慌ただしく作品を入れ替える。

契約テーブル、
全席埋まっている。

バックヤードでも、
簡易テーブルを用意する。

電卓。

ローン契約書。

怒号。

女上司
「売上表、隠しといて!!
今日の目標数字も剥がして!!
お客さん入ってもらうから!!」

若手社員、
慌てて壁に張り出した目標数字を剥がす。

藤堂、
一人立っている。

小さく息を吐く。

売り場へ出る。

遠くで山口、
客を笑わせている。

藤堂、
スーツ姿の男が
ビュッフェの版画を観ているのに気づく。

藤堂、
男の後ろで立ち止まる。

――"こんにちは"だ。

一呼吸。

藤堂
「……こんにちは」

男、
振り向く。

藤堂、

少し驚く。

藤堂
「いらっしゃいませ」

会話が続く。

遠くから見ている山口。

小さく頷く。

〇催事場／夕方

山口と藤堂。

山口
「仕事、聞いたか？」

藤堂
「聞いてません」

山口
「なんで」

藤堂
「職業なんて
聞きにくいですよ」

山口
「ああいう客は
絶対聞いとけ」

藤堂
「失礼じゃ……」

山口
「"ドクターですか？
ティーチャーですか？"
って聞くんだよ」

藤堂
「…失礼すぎません？」

山口
「いや、大概な、
嬉しそうに教えてくれる」

間。

山口
「人間ってな、
自分が着てる
一番高い服を
見せたがる生き物なんだよ」

藤堂
「服……？」

山口
「肩書きとか、
職業とかな」

山口、
スーツ姿の男を指差す。
襟にはＬの文字が刻まれた
バッジを付けている。

山口
「ほら、ああいうの」

男、
笑いながら名刺を配っている。

山口
「アレ着てる時が、
一番 気持ちいいんだよ」

藤堂
「……」

山口

「だから、
そこを引き出せ」

間。

山口
「そしたら
高い絵すすめられるだろ」

藤堂
「それ…最低ですね」

山口
「売れてから言え」

〇催事場／最終日・午前

藤堂、
中年女性に声をかける。

藤堂
「こんにちは」

女性、
振り向く。

藤堂
「いらっしゃいませ。
なにか、お好きな作品とかありましたか？」

女性
「いえ、ちょっと見てるだけです」

藤堂
「そうですか。……
こちらの作品など
いかがでしょう」

女性
「ん。

うちにはちょっと…」

藤堂
「こちらは、玄関などに飾ると
かなり明るくなりますよ」

女性
「う〜ん……なくても困らないし」

間。

藤堂
「……ですよね」

女性
「ごめんなさいね」

去る。

藤堂、
笑顔のまま頭を下げる。

女性が見えなくなった瞬間、
顔が落ちる。

〇催事場／最終日・夕方

混雑。

契約。

笑い声。

遠くで山口、
客に絵を売っている。

滑らかなトーク。

客、
引き込まれている。

藤堂、
ふと気づく。

山口の目線――

客ではなく、
絵に向いている。

その先には、一枚の風景画。

間

藤堂、
初老の女性客を接客している。

女性、
静かな風景画を見ている。

女性
「これ……
リビングだと
大きいかしら」

藤堂、
少し止まる。

藤堂
「……いや玄関とかでも
飾れるサイズですよ」

女性
「でも……
主人に相談しないと」

藤堂
「……ですよね」

間

藤堂

「ただ……」

言葉が出ない。

藤堂
「分割払いでも……できます」

女性
「ん〜　高い買い物だしね」

藤堂
「……はい」

間。

女性
「なくても困らないし」

藤堂、
止まる。

言葉が出ない。

館内アナウンス。

笑い声。

遠くで契約書をめくる音。

藤堂、
緊張して山口を見る。

小さく手を挙げる。

“ヘルプ” の合図。

山口、
気づく。

しかし――

視線を外す。

藤堂
「……」

女性
「？」

遠くから山口。

山口
「押せ」

藤堂、
息を飲む。

藤堂
「……」

女性、
待っている。

藤堂、
女性を見る。

女性、
絵を見ている。

藤堂、
口を開く。

藤堂、
「……お客様」

女性、
振り向く。

藤堂
「買って下さい」

間。

藤堂
「……お願いします！」

静か。

女性
「……わかりました」

藤堂、
止まる。

女性
「分割で、お願いします」

藤堂、
固まる。

女性
「日曜日、
届けてもらえます？」

藤堂、
何も言えない。

小さく頷く。

〇バックヤード／直後

藤堂、
契約書を握って立っている。

放心。

山口、
通り過ぎる。

山口
「……だから言ったろ」

藤堂
「え？」

山口
「客から
“コレ下さい” なんて
言わねぇんだよ」

微笑みながら去る。

藤堂、
契約書を見る。

藤堂
「あっさり
買ってくれた……」

〇ビジネスホテル／夜

色味のない
無機質な部屋の壁。

山口、
一人。

缶ビール。

コンビニのサラダを、
ただ作業のように口に運ぶ。

沈黙。

荷物の横に、
無料で配っていた
三枚のポストカード。

山口、
しばらく見る。

一枚、手に取る。

壁に立てかける。

もう一枚。

もう一枚。

色鮮やかな三枚を
しばらく眺める。

山口、
少し笑う。

山口
「あら？……悪くねぇな」

暗転